チョンソン大博士

ヂョンソン大博士

福原麟太郎著作集

2

研究社
1969

福原麟太郎著作集 2
ヂョンソン大博士
昭和四十四年八月二十日 印刷
昭和四十四年八月二十五日 発行
定価 一、三〇〇円
著作者 福原麟太郎
発行者 小酒井益蔵
印刷者 小酒井益三郎
印刷所 研究社印刷株式会社
発行所 研究社出版株式会社
郵便番号一六二
東京都新宿区神楽坂一の二
電話東京(三九)四五二一(代表)
振替東京 八三七六一
(乱丁・落丁本はお取替え致します)
© R. Fukuhara Printed in Japan
検査済 44.10.23 総務課

目次

一つの視角

英国随筆史……三

随筆文学の意味……三

モンテーニュとベーコン……一一

MISCELLANEOUS WRITTERS……一九

エイブラハム・カウレー……二九

スティールとアディソン……三四

ジョンソン、ゴウルドスミスおよびスターン……四六

チャールズ・ラム会社……五三

ヴィクトリア朝およびその以後……六〇

書目……六六

散文・随筆・ヂャーナリズム……七〇
日記文学……九六
ボズウェルの『ロンドン日記』……一〇一

健康な批評家

ヂョンソン博士の話—放送……一一七
ヂョンソン博士—講演……一二六
健康な批評家……一六〇
『詩人伝』……一七〇
『英語辞典』……一七九

ヂョンソン大博士

第一章「拾弐文豪」号外……一八七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二章　リッチフィールド……一九九
第三章　上京……二一一
第四章　『ロンドン』……二三二
第五章　グラッブ・ストリート……二三三
第六章　『サヴェヂ伝』……二四四
第七章　シェイクスピア全集企画……二五七
第八章　『悲劇マクベス雑感』……二六九
第九章　『人の願望の空しさ』……二八三
第十章　ギャリック登場……二九五
第十一章　劇詩『アイリーニ』……三〇七
第十二章　英語辞書を編み始める……三一九
第十三章　『ラムブラー』誌……三三一
第十四章　細君テティの他界……三四四
第十五章　チェスターフィールド卿への手紙……三五七

第十六章　辞書完成す……三七〇
第十七章　信心、政治、生活……三八二
第十八章　「アイドラー」時代……三九〇
第十九章　『ラセラス』前後……四〇五
第二十章　文学クラブの誕生……四一八
第二十一章　シェイクスピア序説……四二九
第二十二章　奥の細道……四四四
第二十三章　『詩人伝』……四五七
第二十四章　終焉……四七〇

その筆の跡——ヂョンソン文抄

随筆……四八五
一、時の浪費……四八五
二、ディック・ミニム……四八八

文学論考……五〇〇
一、『リア王』……五〇〇
二、『ハムレット』……五〇四
三、『オセロ』……五〇七
四、形而上詩人……五〇九
五、コリンズ……五一五
書簡選……五二二
ブースビー女史あて……五二二
母堂ヂョンソン夫人あて……五二五
ヂェイムズ・ボズウェルあて……五二六
フランシス・バーバーあて……五二八
ヂェイムズ・マクファーソン氏あて……五三〇
スレイル夫人あて……五三一
スレイル夫人あて……五三四

ヂェイン・ラングトン嬢あて……五三八
ピオッツィ夫人あて……五三九
あとがき……五四一
掲載紙誌一覧表……五五二
著者(昭和三十六年)　対本扉
ヂョンソン像並びに筆跡　対一三四
ヂョンソン夫人肖像　対一三五
ガフ・スクウェアの家　対二九四
インナー・テムプル・レインの家
ヂョンソンズ・コートの家
ボウルト・コートの家　対二九五
『英語辞典』扉　対三七四
『詩人伝』より　対三七五
ヂョンソン肖像　対四七〇
スレイル(ピオッツィ)夫人　対四七一

一つの視角

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

英国随筆史

随筆文学の意味

随筆とかエッセイとかいうものは、どのようにも定義することが出来る。エッセイは随筆に当るとか当らないとかいうのも無駄な詮議で、そのどちらの言葉も広い範囲に通用しているから、当らない理屈をいえば当らないようになる。まず随筆文学というのは英国の Essay 文学の事という事にしておく。小説が本格的だとか本格的でないとかいうのは、何も小説に本格という格が定まっているわけでなく、歴史的に今まで小説と考えられて来たもののうちで、帰納抽象して最も普通な形を本格的というのである。それと同じように随筆にも本格的というものがあるはずであるが、随筆たるやその種類が実に多岐で、最も普通なものというものを取り出すことさえ困難である。

それは主として歴史的に変化しながら発達しているからである。ベーコン (Francis Bacon) のエ

ッセイは警句的で道徳的である。ブラウン (Sir Thomas Browne) などのは、多く物識りの話である。ロック (John Locke) の『人間悟性論』(*Human Understanding*) にも *Essay on* と前についているけれども、これは学問の話である。ロックが随筆ならホッブス (Thomas Hobbes) の『リヴィアサン』(*Leviathan*) も随筆である。カウレー (Abraham Cowley) やスティール (Sir Richard Steele) となるといくらか身の上話的になり、アディソン (Joseph Addison) やヂョンソン (Samuel Johnson) は教訓的である。しかしそのうちこの身の上話というものが、ゴウルドスミス (Oliver Goldsmith) からラム (Charles Lamb) に至るに従って、優位を占めて来て、ラムではほとんどすべておのれの物語である。しかし同時代のディ・クウィンジー (De Quincey) やハズリット (William Hazlitt) やリー・ハント (Leigh Hunt) がラムと同じ種類のものを書いたわけでなく、また等しくエッセイといっても、カーライル (Thomas Carlyle) やアーノルド (Mathew Arnold) たとえば『バーンズ論』(*Essay on Burns*) や『批評論集』(*Essays in Criticism*) のごときは論文でブラウン (John Brown) の「犬の話」のごときは小説のようなものである。下って二十世紀初頭前後には、身の上話もラムのように familiar ではなくなって、書斎雑筆、街頭雑筆の類が氾濫する。

そのどれをエッセイとし随筆というべきかには茫然たらざるを得ない。私自身は、ラムの随筆をエッセイ文学の粋と考え、そのようなものを——ラムのようなものをエッセイすなわち随筆という

と定義するのであるが、それでは不服な人もあろう。『文芸春秋』の初めの数十頁にあるような主として珍しい見聞の覚え書のようなものが本当の随筆だという人もあろう。これは人々の好みである。しかし大体英文学で Essay と呼ばれているものを歴史的に見てゆくと、ラム的なものに発達して来、ラム的なものから流れ出して来たエッセイという形式に何か一つの continuity が感じられる。そしてそれは、われわれの国で随筆というものの諸々の性質のうちの主な性質にも符合すると思うのである。それで、随筆文学というのはラム的なものという事にしておく。

ラム的なものを中心にして考えると英国の随筆文学に continuity が感じられる、というのは多くの随筆のうち、若干を捨てて外縁的なものとし、ロックやアーノルドは Essay と言いながら、エッセイのカテゴリーに入らぬものと考え、配列を整備して、その中に continuity を認めるのであるから、相当わがままなやり方である。しかもそのためにはラム以前のものとラムとラム以後のものとを区別することも余儀なくされる。しかし、随筆文学はラム的なもの、それで随筆文学の歴史を考えることが出来るというのがいちばん良い扱い方のように思う。

そこで、英文学における随筆文学の研究を始めるとして、ラムの鍵によってその作品作家の歴史的配列を作るとする。まず理論的なものや、批評文学的なものを除外する。知識的なものや教訓的なものを敬遠する。そして純文学という立場から生活の記録ということと表現の技術ということを

重視する。そのうち生活の記録としては、さきに誌した身の上話という事を主な題材と考える。それは自然に、心境を語るものになって来るであろう。すなわちそれは個人生活の物語で内省的な観照である。それはやがて人間性に通じる機微を捉えることによって、その個別的な特殊性から解放せられ、人生的な広がりに到達する。すなわちそれは内側に向いた人間的興味に終始する記録である。

つまり内面生活の記録ということになるが、それは小説もよくするところであり、詩歌もそれを行なっている。日記や手紙もまたそうである場合がある。随筆というのは、散文の事をいうのであるから、詩歌はいかに内面生活を記録しても随筆とは言われない。しかし、ブラウニング（Robert Browning）の『アンドレア・デル・サルトー』（*Andrea del Sarto*）のごときは随筆といってよいものである。けれども詩歌は除外する。小説にも同様のものがある。たとえば、ディ・クウィンジーの『阿片喫みの告白』（*The Confession of an Opium-Eater*）のようなものである。これらは、小説と随筆のあいのこである。日記や手紙は随筆と似たものとして既に随筆的に見られ、その他説教（Sermons）や卓上談（Table-talk）のごときもしばしば随筆の圏内に入れられている。しかし、小説でなく日記でなく説教でなく、真に随筆であらしめるものは何であろうか。それはおのれの“ego”を主たる興味とするという事であろうと思う。自らの話である。そしてそれは会話とか客

観描写とかいう事なしに、常に打ち明け話の形で書かれる。*Familiar* Essay とか *Personal* Essay とか、限定して指摘されるものが、私のいう随筆である。

技術を重んじる。これも記録と並んで重要な要素であると思う。随筆というのは決してでたらめの叙述ではない。それはでたらめと見えて、実はちゃんと芸術的なまとまりを持っているものである。少なくともラムについてはそうである。ラム的なものは常にそうである。表現の上に工夫があり complete whole としての一つの effect をねらっている。そういう点で、短篇小説や一幕物と似た性質を持っているものである。また、この芸術品としての効果という事に関し、随筆的な世界は表現の技術として、韻文となっては叙情詩となり、散文となっては随筆となるという説もあるが、これには賛成しない。叙情的という事は、身の上の打ち明け話という題材から来るものであって、主観的という点において一致していても、随筆は叙情詩のごとく高揚された醇化された主観ではなく、もっと猥雑な、地上的なものであり、叙情詩の感情をいかに猥雑に地上的に下して見ても随筆は生れそうもない。また叙情詩におけるごとく感情ばかりが随筆を動かしているのではなく、あらゆる人間的な興味が重要な働き手でその混沌としたところに随筆の妙があり、感情の首位を必要な組織とする叙情詩とは違った種類のものであると思う。しいて言えばさきの『アンドレア・デル・サルトー』のごとき internal dialogue が、むしろ随筆を詩歌で行なったものである。

そういう随筆は、ワーズワス(William Wordsworth)のいう tranquility の中からでないと生れにくい。そこで Idleness の精神から出た懶惰の文学が随筆文学だという。現実の閑でなくてもよい。心のゆとりから書かれるものだという。これは今まで考えて来たような読者から見た随筆の性質でなく、作者から見た随筆の生れる心境を定義しようという試みから言われるのであるが、これは確かにそうであるらしい。しかし Idleness というのは註釈を要する。それは、のらりくらりと遊んでいる事ではない。己れを歪曲する慾望を持たないで、身心を自然にまかせ、悠々として人生を眺めていることである。モンテーニュ(Michel de Montaigne)の『随筆』(John Florio の翻訳による)第八章は「懶惰について」("Of Idlenesse")というのであるが、その中に次のように書いてある。

It is not long since I retired my selfe unto mine owne house, with full purpose, as much as lay in me, not to trouble my selfe with any business, but solitarily and quietly to weare out the remainder of my well-nigh-spent life; where me thought I could doe my spirit no greater favour, than to give him the full scope of idlenesse, and entertaine him as he best pleased, and with all, to settle him-selfe as he best liked: which I hoped he might now, being by time become more settled and ripe, accomplish very easily but I finde,

Variam semper dant otia mentem.—Lucan, iv. 704.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com